

2017年

春の課題作文優秀作品

【中学部】

中山校 S・Yくん（中山中）

私は付度することが良い場面と良くない場面があると思う。それは相手の心情を推し量って行動することは、相手への「気遣い」だからだ。

日本に存在する仕事の多くは、接客やサービスで成り立っている。相手をもてなし満足させることが、評判を良くし、新規のお客を呼び込むだけでなく、リピーターを増やすことにもつながる。そのためには「付度」という「気遣い」が必然不可欠である。

例えば、食事の後、頼んでもいなくともサツと差し出されるお茶、散髪後にくれる温かいおしぼり、宿泊先での笑顔のお出迎え、お見送りなど。これらの「気遣い」によって「おいしかった」「さっぱりした」「楽しかった」という気持ちにプラスして、充実感や幸福感を得ることができるとだ。

しかし一方で「付度」が接客・サービスする側の思いとは違った形で相手に伝わってしまうこともある。昨年、大阪のある寿司店が、外国人観光客に対して、わさびが大量に入った寿司を提供し問題となった。店側はあくまでも、わさび好きな外国人への「気遣い」だと主張したが、観光客や世間からは「差別だ」「非人道的だ」などといった批判が相次いだ。

つまり、良い付度と良くない付度は、常に背中合わせにある。その境界線は、節度を守るか守らないかだ。節度を守った付度は、相手に充実感や幸福感を与え、逆に度を越した付度は、おせっかいやえこひいきとしてとらえられ、相手に不快な思いをさせる。同様に森友学園問題も、役人が「付度」の境界線を超えてしまったがために、関係者に迷惑をかけ、世間からも非難を浴びた。

「付度」は悪い事ではない。相手への「気遣い」だからだ。これから僕は、自分の相手を思った行動が境界線を越えていかないかどうかを一旦立ち止まって、常に確認していかうと思う。

センター北校 K・Yくん（中川中）

私は集団の生活や行動の場面では付度をするほうが良いと思う。それは、日本人はもともと自分自身を主張する国民ではないからだ。

私は今、学級委員、地区学年代表、自然教室班長兼クラス代表と何役もやっている。人前で発言し、みんなの意見をまとめることが主な仕事であるが、そんな中で自分の意見を言えず、ただみんなに従ってしまう人もいる。そんな時、私は付度をしてあげなければならぬと思う。必ずしも相手の気持ちや考え方が分かるわけではないが、本当にこれでもいいのか、同じ意見なのかを想像するようにしている。

元々、私自身も自分を主張できる人間ではなかった。しかし、小学六年生の時、所属していた野球チームのキャプテンを任された。そのチームに入部して半年後のことだったので大抜擢だと喜んだ。しかし、後輩が四十名、総勢五十人以上を束ねるのは容易ではなかった。チームをまとめるためには、付度することが重要であった。一年生が六年生に意見を言えるわけもなく、気を遣っている後輩に声をかけてあげることでチーム内の雰囲気は良かったと思う。

普段、付度という言葉について考えたことはなかったが、相手に気を遣い、気を利かせることで調和が保っているのが今の日本の社会である。また、周囲を気にせず自己主張し続けると、協調性がないと見られる。そのため、ストリートに表現せず、相手の想像に任せるような表現があるのだと思う。アメリカのように自分の主張を優先する国にとっては付度に関して理解不能だろう。

決して主張できない人間にはなりたくないが、相手の立場を考えた上で、発言や行動ができる人間にはなりたい。そのためにも、今後の私の人生で付度は必要だと思う。